

市民科学通信

2024 年 7 月号

(通算 50 号)

2024 年 7 月 28 日 発行

発行: *NGO* 市民
科学京都研究所

事務局 E-mail :
sigemo.nao@gmail.com

目次

NGO 市民科学京都研究所

第 24 回市民科学研究会のご案内・・・・・・・・・・ 0 2

コロナワクチンは何だったか・・・・・・・・・・塩小路橋宅三・・ 0 3

銃器・兵器と「駆除」＜武器よさらば：銃器・兵器の

「使用価値（有用性）」を考える（3）＞・・・・宮崎 昭・・ 0 5

【コラム】「戦争絶対非認」は理想論という意見について

—「現実」と「理想」の狭間で考える—・・・・重本冬水・・ 1 1

《冬水文庫だより》・・・・・・・・・・重本冬水・・ 1 3

【短信】まどろみ・・・・・・・・・・中村共一・・ 1 5

松本清張と丸山眞男・・・・・・・・・・竹内真澄・・ 1 8

ニュートンとスタンダール・・・・・・・・・・竹内真澄・・ 1 9

普遍「不到」・・・・・・・・・・竹内真澄・・ 2 0

近況短信：ファンタジーにある「老い」

—団地タクシー奮闘記「タクシー繁盛記」の巻—②〇・・・・宮崎 昭・・ 2 1

追悼 久我美子さん・・・・・・・・・・照井日出喜・・ 2 3

NGO 市民科学京都研究所

第 24 回市民科学研究会のご案内

東京での研究会は久しぶりです。2017 年 12 月 24 日～25 日、大学セミナーハウス（東京都八王子市）での合宿研究会（社会共生学共同研究プロジェクトの取り組み）として開催して以来です。この時の報告は、「ジェンダー論の原理的考察」（篠原三郎）、「マルクスはいかに資本主義をマネジメントしようとしたのか」（重本直利）、「柄谷理論における主体論をめぐって」（中村共一）、「生きた人間と経営学をめぐって」（國島弘行）の 4 本です。新型コロナによる中断を余儀なくされ、ようやく東京での共同研究会となりました。開催にあたって駒澤大学の中西大輔さんにご協力いただきました。ありがとうございます。多数のご参加を願っています。

日時；2024年10月6日（日）13:00～16:30

場所；駒澤大学（駒澤キャンパス、東京都世田谷区駒沢1-23-1）。

交通手段；東急田園都市線「駒澤大学」駅下車、徒歩10分（下記地図）。

プログラム

1. 「コミュニケーション資本主義とマクロマーケティングの意義」

中西大輔（駒澤大学経済学部）

2. 「銃器の世界的使用価値」（仮題）

宮崎昭（市民科学京都研究所）

※「武器よさらば：銃器・兵器の『使用価値（有用性）』を考える」(1)～(3)、
「市民科学通信」48～50 号で連載中です。

3. 「いま『非戦』とは」（仮題）

中村共一（市民科学京都研究所）

《研究会終了後、懇親会を行います》

2024年7月24日 理事会

事務局（重本）sigemo.nao@gmail.com



《駒澤キャンパスの地図》

コロナワクチンは何だったか

塩小路橋宅三

2020 年当初からの日本は異常であった。3 月 29 日に国民的コメディアン志村けん氏が亡くなってからは、日本国民はある種の集団ヒステリーに陥った。4 月 7 日、通常の思考では考えられない「緊急事態宣言」発出され、自らが監視されることを政府に委ねるようになった。翌年 2 月からは安全性も定かでない治験レベルのコロナワクチンを早く接種できるようにとの国民的要望に、「専門家」を標ぼうする医師も効果が分からないままに受けることをすすめるようになった。3 月には接種後の死亡者が発生しているにも関わらずに、医療関係者に対してや職域接種では実質的強制であった。ワクチンを信じた者は 7 回も接種を受けることになったが、医療関係者も含めて多くの人は 3 回ないし 4 回でおかしいと思いつつ止めている。2023 年 5 月に 2 類感染症から 5 類に変更されて、正常な形に戻りつつある。

これだけ焦って危険ともいえるワクチン接種を国民に強いたのは、副作用は軽微で接種により集団免疫が形成され、ワクチン接種のリスクよりも感染がまん延することによる重症者発生リスクのほうが大きく、何も手立てをしないならば 40 万人以上が死亡するという嘘が誠しやかに「専門家」から発信された。少なくとも感染予防や重症化予防効果があって、2 回のワクチン接種で十分という嘘は明らかになっている。嘘でないとの反論としての接種効果の数値的証拠は未だに発表されていない。そんなことを言えば、「反ワク陰謀論者」であるとのレッテル張りは今なお続いている。医療関係者の中からも接種しなかったほうが良かったのではないかと声も出て来ているが、この嘘の責任問題までには言及していない。米国の政官財にまたがる「ディープステート」の戦略にまんまと乗ってしまった日本政府の構図がうかがえる。日本国民の富がこれらのロスチャイルド家やロックフェラー家などの国際金融資本に多額流出したことは想像に難くないと思える。表向きは国際協調路線であっても、米国の意向によって総理大臣も代わらざるを得ない日本の現状を垣間見た。

感染しても重症化する率が低い若者に対してはあなたの大事な人を守るためにワクチン接種を受けるべきと、まるで軍国日本を彷彿させるようなプロパガンダが行われ、受けない若者は非国民のように責められることとなる。されど、ワクチン接種が原因で死んだ若者は祀られることもなく英雄にもなれなかった。とくにオミクロン株は重症化する率が低かったのにもかかわらず、2 類感染症は維持され続けてワクチン接種のプロパガンダはやむことがなかった。次第に接種をすすめていた身近な医療関係者は沈黙を守るようになり、失政を認めない政府によるマスコミを利用した情報のみとなりつつあった。しかも強制ではなく任意であるとの逃げ道を前に出すようになって責任逃れを模索し始めていた。集団ヒステリーが覚めてきた 2022 年 7 月に安倍元首相の謎の射殺事件が生じ、それ以降は統一教会問題がマスコミなどに取り上げられるようになり、国民の関心をそちらのほうにシフトすることにより製薬会社と政治の癒着による「人災薬害」という重大な犯罪を隠ぺいすることとなる。翌年の 6 月には岸田首相が申し訳のようにワクチン接種に応じている。

このように未知のウイルスへの不安を煽り、恐怖心でのパニックの中で「自粛警察」なるものまで出現し、この騒動の中で誰が利益を得たのであろうかを冷静に考えてみなければならない。健康な人に感染予防のためにワクチンを接種し、その結果として不幸なこととなっても製薬会社は責任を取らないなど、不可解なことが冷静さを取り戻した今になってわかってくるのである。これは単なる医療事故ではなく「人災薬害」であると、選挙においても争点とすべき問題であると考え。政治家が逃げる問題ならば、医療研究者はその良心に基づいて問題提起しなければならないし、自然科学者ばかりでなく社会科学者も「反ワク陰謀論者」と言われることに抵抗しなくてはならない。今回のパニックを通じてのすでに実施段階に入った政府の中央集権による地方自治権の制限を認めるわけにはいかないのである。

今回のようなパニックになった原因は政策に問題があったためと考え、コロナ禍でなく「コロナ対策禍」であった断言できる。ゼロコロナなど無理なことは多数の人が気が付いていたのに、恐怖心を煽られて集団ヒステリー状況に陥ったのである。そこで救世主のようにワクチンが登場したために接種を多くの人が受け入れた。軽い副反応が大多数の人ならば、少数の者がワクチン接種によって死んでも仕方がないと他人事となった。自分は根拠がなくても少数にはならないと信じ込んでしまったのである。しかしながら、ワクチン接種したのにかかわらずにコロナ感染が目立ってきて恐怖心は薄らぎはじめ、コロナのためよりワクチンのために死ぬ人の話題もささやかれるようになった。政府はワクチン接種しても感染対策は必要と説明し続けているが、国民の多くは接種しなくても沈静化する事実を感じるようになってきた。されど政府の説明を信じて死んだ人のことを考えると、この「人災薬害」の責任を追及しなければならない。ワクチンは良いものではなく打たないほうが良かったと考える人も増えてきている。自ら打たずに接種を推進してきた医療関係者の責任も仕方がないで済まされない。つまり、パンデミックでなくてパニックだったのである。

それにしてもワクチンさえ打っておけば安心と嘘の情報を扇動した政府や「専門家」、製薬会社にマスコミの責任は大きいと考える。便乗して金儲けにつなげた評論家を許すことはできない。また、このように恐怖心を煽られると集団ヒステリーに至る自らも反省しなければならない。大儲けしたファイザーやモデルナといった「人災薬害」の主人公は免責を盾に逃げ切ることは容易に想定できる。今後、mRNA から自己増殖型のレプリコンワクチンが話題になっていのが、絶対安全などということはある得ない。少なくとも健康な個体にとってのワクチンは毒であるという再認識が必要である。毒を以て毒を制することに賛成できる者は接種を受ければよいのである。この前提が天然痘ワクチンによる成功のレガシーがあるために打ち消されている。ここは冷静に考えてみる時期ではないかと考える。つまり、ワクチンを打つ打たないの決定権はあくまでも個人にあることを認識して、その選択に対して集団的に圧力をかけることは反省材料としておかなくてはならない。自由を制限されることへの同調は雰囲気と考えてはだめなのである。

(しおこうじばし たくぞう)

銃器・兵器と「駆除」

＜武器よさらば：銃器・兵器の「使用価値（有用性）」を考える（3）＞

宮崎 昭

北海道や東北などでクマによる被害が多発して、農産物だけでなく、牛などの家畜や人命をも奪っています。それ以外にも、外来生物による生態系の侵食など人間社会にとって有害となる生き物に悩まされているのが現状です。こうした事態をメディアが報じる際に、「駆除」という表現があることに実は少々違和感をもっています。

害虫駆除というお馴染みの、シロアリやゴキブリなどを対象とした殺虫剤もしくは捕獲器は、多くの家庭でも常備しています。「害虫」であれば駆除することに反対する人は少ないと思いますが、「害獣」となると意見が分かれます。かつて飼い犬だったものが、野性化して人間を襲うことになると、殺処分にするか「保護犬」とするか、意見の分かれるところです。

イノシシやシカなどの「動物」——鳩・カラスなどの鳥類、ゲジゲジやナメクジ、カメムシなどを含む虫の仲間——は人間以下の生物であり、人間が上級動物であって、見下され殺されてしめるべき存在となります。人間社会との“距離感”が「駆除」する基準になっているように思われます。ペットとして愛される犬や猫とは対照的に、虫などの「命」に拘泥する人は、マニアは別としてほとんどいません。いずれにせよ、人間にとって有害と思われる存在は「駆除」して然るべき存在だと思われています。

「銃社会」のアメリカは、いまなお白人至上主義の「人種差別社会」でもあります。黒人は「下級動物」であり、まるで「害虫」のように駆除されてきました。

ビリー・ホリディの唄に『奇妙な果実』があります（1939年リリース）。黒人であるという理由だけで、私刑（リンチ）を受け、殺されて木に何日も吊るされた同胞への惜別と怒りの歌です。ネットで見つけた歌詞を紹介します。

strange fruit

Southern trees bear strange fruit,
Blood on the leaves and blood at the root,
Black bodies swinging in the southern breeze,
Strange fruit hanging from the poplar trees.
Pastoral scene of the gallant south,
The bulging eyes and the twisted mouth,
Scent of magnolias, sweet and fresh,
Then the sudden smell of burning flesh.

Here is fruit for the crows to pluck,
For the rain to gather, for the wind to suck,
For the sun to rot, for the trees to drop,
Here is a strange and bitter crop.

奇妙な果実(Strange Fruit)

南部の木は、奇妙な実を付ける
葉は血を流れ、根には血が滴る
黒い体は南部の風に揺れる
奇妙な果実がポプラの木々に垂れている
勇敢な南部 (the gallant south) ののどかな風景、
膨らんだ眼と歪んだ口、
マグノリア (モクレン) の香りは甘くて新鮮
すると、突然に肉の焼ける臭い
カラスに啄ばまれる果実がここにある
雨に曝され、風に煽られ
日差しに腐り、木々に落ちる
奇妙で惨めな作物がここにある。

ビリーの歌声は、いかにも憂いを帯びて悲しげで、何度聞いても胸に刺さります。しかも、この「果実」は形を変えて、いまなお「作り」続けられているというのですから、なんとも無念です。

2022年5月14日、アメリカニューヨーク州バッファローのスーパーで白人至上主義者による銃乱射事件が起こり、犠牲者の多くが黒人であったと言われています。この地域は黒人が多く居住していることを知った上での犯行で、この18歳白人男性の行為を非難するのではなく、逆に賛同、賞賛する者が多かったという事実も衝撃的です。そもそも黒人は「駆除」して当然の「害虫」なのです。

戦争は敵を倒し勝利することに目標があるわけですから、銃器や兵器に品格などある由もありません。前回紹介したカラシニコフがそうであるように、いかに簡単で、素早く、多数の命を奪うか、その絶体絶命の局面に使用価値があるからです。“戦争の合理性”を正当化する使用価値なのです。

銃器ではないのですが、地雷という卑怯極まりない兵器に触れたいと思います。私が子どものころ雪道で作った落とし穴とは全く違います。笑えません。地雷の開発は古く、アメリカの南北戦争の時だったということをネットで知りました。私たちの生活では地雷が身近にないことでもあり、少しく解説に耳を傾けることにします。

対人地雷は、あえて体に障害を残すように設計された、唯一の兵器です（目加田[1998]2頁）。

対人地雷はその種類に関係なく、手や足や視力を失うといった後遺症を残すことを目的にした武器である。だから、被害にあっても即死はしない。

地雷に手足が触れて爆発すると、骨と肉が飛び散り、手足がもぎ取られ、被弾した地雷の破片を全身に浴びるような被害を受ける。爆発の衝撃によって、傷口の奥深くまで、舞い散った土や草が入り込む。それは細菌などが体内で増殖する原因となり、きちんとした処置がほどこされないと、長期にわたり傷口が化膿し、何度となく切断を余儀なくされる（同上）。

多くの地雷被害者は一人でいるときに被害にあい、通信や交通手段が未発達 of 農村地域では、負傷してもすぐには病院に運んでももらえない。ICRC（赤十字国際委員会…宮崎）のデータベースによると、負傷後 6 時間以内に病院に到着したのはわずか 25% で、それをふくめて 24 時間以内に到着できたのが 70%。したがって残り 30% の被害者は、まる一日以上たつてようやく病院で手当てをうけることができたことになる（同 3 頁）。

この地雷の「使用価値」、質の悪さは、軍人であるか市民であるかの区別をせずに殺傷するところにあります。文字通り無差別兵器、「^{たち}悪魔の兵器」です。自分の姿を晒すことなく、犠牲となる者にボタンを踏ませますから、あたかも自爆のような外観で許せません。しかも、いったん埋め込まれた地雷は地中で何十年も、その「チャンス（機会）」を黙して待っています。だから、戦争が終了してもなお、地雷の被害は後をたちません。カンボジアがその典型例です。

「銃器の技術革新」（宮崎[2024]）と同様、地雷もまた第一次世界大戦、第二次世界大戦を経て対人地雷から対戦車地雷へと開発が進み、今では人工衛星やコンピューターを活用した“無人兵器”が大きくせり出しています。

思い出すのは 1991 年の「湾岸戦争」です。高度な科学技術を利用した「駆除」の方法がテレビで映し出され、まるでゲームのような錯覚を覚えたことが強く印象に残っています。広瀬[2001]は、次のように説明しています。

エレクトロニクスなしには、ミサイルも国防もない時代となった。人工衛星は、自動車の運転位置を教えるカーナビとは精度が格段に異なる通信技術によって、戦場の状況を 1 メートルの誤差でペンタゴンに写真搬送する機械である。91 年の湾岸戦争と 99 年の NATO 軍によるユーゴスラビア空爆で、米軍はコンピューターのディスプレイ画面を見ながら、そこに見えた標的をマウスで指すだけで相手をミサイルで爆破するという、ピンポイント・リモコンゲームを展開した。密かに敵の姿をとらえると、低空で敵地に侵入する巡航ミサイルでその「物体」を撃破する。人間ができないことを機械が平然とやっつてのけ、軍人は正常な感覚をほとんど失い、人間を殺すことに針ほど痛みを覚えなくなった。このイラクとユーゴに見た殺人実験場は、衛星を経由して全世界で受信され、他国の軍人にとって兵器の精密さを測る軍事ショーとなった（48 頁）。

マウスをクリックするだけで、建物が爆破され、その場にいた人たちは一斉に「駆除」されています。いまなおウクライナの戦場では塹壕と突撃銃、そして戦車や砲弾が利用されていますが、すでにドローンや翼と誘導装置が付いた滑空爆弾などの“非対面型”のハイテクノロジーな兵器も活用されています。地雷をはじめ、ステルス兵器は“相手を選ばない”という意味で、農業や都市のインフラをことごとく破壊しつつ、地球環境を危機に迫っています。

「駆除」するための高度な銃器や兵器の開発は、科学技術の発展によるところ大なのですが、他方では人の命に対する“尊厳”を徹底して破壊しつくすプロセスでもあります。銃器や兵器が「高度化」するのに従って、これを利用する人間の精神はといえば、本人が自覚しないままに「馴化」し、倫理観を喪失させてしまいます。改めて指摘したいのですが、銃器・兵器の使用価値は、ただ駆除する道具（機械）の性能にあるだけでなく、銃器・兵器を操作する自己（精神）をも、これに埋め込む「優秀」な兵士を育て上げることにあります。「優秀」というのは、簡単に言えば、銃器などで平然と殺人を行えるような兵士の能力のことです。銃などの操作が簡単であればあるほど、逡巡することなく良心に苛まされることが少なくなるからです。これが国家の偽らざる普遍的な要請です。

しかし、後日、これが PTSD(心的外傷後ストレス障害) となって苦しむことになり、自死する者も相当数です。これまで普通の市民であった者が、急きょ兵士となって銃を構え、敵兵や一般市民を射殺するという「殺人」の行為は尋常ではありません。だから、兵士の心身を“戦闘行為”に馴化することは容易ではありませんから、国家が何らかの対策をとることも考えられます。銃器・兵器を使ってその使用価値を実現するためには、使用する人間の“向かう姿勢、気構え”が重くのしかかるはずです。映画『人間の条件』（小林正樹監督、五味川純平原作）のなかで、銃剣で中国人を殺害する命令を受けた兵士の苦悩が描かれていました。戦場ではタフな人間が求められます。つまり、銃器・兵器の性能を十二分に活用する、使用価値の実現主体のことです。「ジョン・ランボー」（映画『ランボー』シリーズ）もそうでした、「ハリー・キャラハン」（映画『ダーティハリー』）は、銃器を使った「殺人」に何のためらいも憂いもありません。それが「理想」なのです。銃を撃つ人間がランボーやキャラハンに集約されることは、自身が英雄となる夢想です。翻って、なぜ「月光仮面」は銃を持っていたのか、なぜ「多羅尾伴内」もまた銃を駆使していたのか、今となっては冷や汗のでる思い出です。「少年ジェット」もなぜか銃を使っていました。日本は当時から、ドラマのなか、仮想社会のなかだとはいえ「銃社会」のなかにいたと言っているのかもしれませんが。

如何にも、私たちの身近に「銃社会」はあり、タフな兵士のイメージは出来上がっているのでしょう。そうであるだけに、人体改造の「夢」はそう遠くない道標になってきます。櫛島[2023]は、国家による「兵士の心身の強化改造」の試みに警告を発しています。第二のランボー、キャラハンをいかに作りだすか、という悪魔の試みです。

兵士の強化改造技術とは、薬物の投与や外科手術・各種装置の埋め込みなどにより、身体的・心理的・認知的能力を強化する措置を人体に施すというものだ（116 頁）。

たとえば、ノーベル賞を受賞したクリスパーというゲノム編集技術を使って、筋肉を強化した警察犬を作る研究が行われているという。これは兵士の増強が可能かどうかは、まだ仮説の段階にとどまっていてわからない（119 頁）。

櫛島[2023]は、フランス軍事省防衛倫理委員会による意見書（兵士の心身を強化改造する技術の研究開発を認める意見書）を良質な基準と見据えて、日本の現状に危惧を示しています（116 頁）。

…日本の防衛省・自衛隊における人間を対象にした実験研究は、国内の民生分野の研究一般と同等の審査と管理は受けているようだが、軍事関連研究としての特別

な審査や管理は、少なくとも制度上は行われていないようである。

そこで最も懸念されるのは、実験研究の対象にされる自衛隊員の人権の保護は十分に行き届いているだろうかということである（193－194 頁）。

地球上のあらゆるところで、軍事大国の覇権争いが私たちの生活を脅かす度合いが高まり続けている。困難な国際情勢を前に、軍備の増強を進める動きばかりが目立つのは非常に気がかりだ。そんな今こそ、国防と市民社会の関係のあり方について、みなで真剣に考えなければならない（197 頁）。

「自衛隊員の人権の保護」という指摘に、真剣に向き合うことが重要だと感じています。「国防」という課題と市民社会との結合を、いかにしてスマートに成就することができるか、それが問われていると思うのです。

戦争と人権との関係、戦争と民主主義との関係、いずれも私にとって未踏の領域に入り込むこととなります。銃器・兵器の使用価値という問題設定をしたのですが、人体実験や人権の問題にまで広がってきました。でも、それは次回以降でも論じるつもりですが、「使用価値の社会的性格」がそうだからなのです。

なぜ「銃社会」のアメリカが、「世界最強の民主主義国家」なのか、ここに銃器・兵器の世界最大の生産・輸出国である実相が見えてくるのではないのでしょうか。

＊7月14日（日）、テレビで「緊急速報」が流れ、アメリカ元大統領トランプ氏がライフル銃で襲われたことが報じられました。彼を筆頭に共和党は銃規制に強く反対しています。全米ライフル協会から多額の資金を提供されているトランプ・共和党に銃が向けられたという、何とも皮肉な話なのですが、これが銃規制の世論づくりに貢献するかどうか、かなり疑問です。というのも、こうした銃による事件が後を絶たないからこそ、自分を守るためにより精度の高い銃所持が必要だという声が大きくなるからです。ちなみに、使われたライフル銃は殺傷能力の高い「AR15」で容疑者の父親が合法的に購入したものと現地のメディアは伝えています。

つづく

【参考文献】

- 鶴浦 裕[2014]『銃社会としてのアメリカ』文京学院大学外国語学部文京学院短期大学『紀要』第13号
- ジャン＝イヴ・ルナール「第一次世界大戦 二十世紀の到来を告げる砲火の洗礼」、エマニュエル・エシュト／ピエール・セルヴァン監修、義江真木子訳[2024]『殺戮の世紀 1914-2014 世界を変えた20の戦争』新評論
- チャック・ウィルズ、山口 昇監修、堀口容子訳[2015]『図解 世界の武器の歴史 石斧から自動火器まで』グラフィックス社
- デンドウ・ゲーリー[2019]『アメリカの銃社会の過去、現在、未来』『文学部論叢』№143
- 広瀬 隆[2001]『アメリカの巨大軍事産業』集英社新書
- 櫛島次郎[2023]『科学技術の軍事利用 人工知能兵器、兵士の強化改造、人体実験の是非を問う』平凡社新

書

丸田 隆[1996]『銃社会アメリカのディレンマ』日本評論社

宮崎 昭[2024]「銃器の技術革新<武器よさらば：銃器・兵器の「使用価値（有用性）」を考える（2）>」『市民科学通信』第49（6月）号

目加田説子[1998]『地雷なき地球へ 夢を現実にした人びと』岩波書店

柳沢協二・伊勢崎賢治・加藤 朗・林 吉永、自衛隊を活かす会編[2024]『戦争はどうすれば終わるのか？ウクライナ、ガザと非戦の安全保障論』集英社新書

矢部 武[2023]『銃で殺す国、アメリカ 終わらない「銃社会」の深層』花伝社

（みやざき あきら）



【コラム】

「戦争絶対非認」は理想論

という意見について

—「現実」と「理想」の狭間で考える—

重本冬水

現代社会の諸問題「東アジアの未来—龍谷大学から東アジアの未来を構想する」という教養科目で、「非武装中立と『市民の科学』—東アジアの平和状態の創生に向けて—」というタイトルで授業を行いました（2024年7月22日、私の肩書は、NGO市民科学京都研究所専任研究員＜理事・事務局長＞、龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター元事務局長）。

この授業にあたっては学生同士の議論の課題に「『戦争絶対非認』というスタンスをどう捉えますか？」をあげました。授業を40分程度行い、その後、この課題について学生の13のグループ毎での議論が行われました。その結果、多く出されたのは「戦争絶対非認は理想論、現実的ではない」という意見でした。予想していた意見、いつも出される意見です。

授業で私は、「何のために国同士は戦争するのか。私を含め市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くありません。中国も台湾も韓国の市民も互いに殺し合うつもりは全くありません。今も市民間の交流は数多く続けられています。私たちは東アジアの民です」と述べました。市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くないのが「現実」です。これは「理想」ではありません。現実です。にもかかわらず、「国家」が殺し合いを市民に強制する、これが戦争です。だから「戦争絶対非認」を主題にしました。殺し合いを強制する「国家」とはいったい何か。「国家」自体を論ずべきですが、授業は時間となり終了しました。そこで、以下、追論します。

+++++

この学生たちの意見には「国家」が強いる戦争が「現実」となっています。だがこれは「現実」なのでしょうか。フィクション（非現実）ではないか。市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くないのが「現実」です。フィクション（＝人間が創ったもの）である「国家」という仕組み・仕掛けが、「市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くない」という「現実」を強制的に戦争に駆り立てているのではないか。「市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くない」ことこそが「現実」であり、戦争は「国家」というフィクション（非現実の「理想」＝イデー）が行う行為ではないか。何故、「市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くない」のに戦争に駆り立てられるのか。「戦争絶対非認は理想論」というイデーは人々を戦争に駆り立てる主張になるのではないか。

もうひとつ「資本主義と戦争」も論点としました。資本主義は貧困、経済的格差を生み出し、戦争の温床・契機となっています。また、戦争は「資本」にとって巨大なビジネス（金儲けの場）です。金が儲かるならば何でもありの資本主義です。こうした「資本」批判を理想論という

学生はいませんでした。「市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くない」という「現実」に比べ、こちらの「資本」の「現実」に対する批判は学生にとってリアリティ（現実性）があるようです。だが、この「資本」も人間が創ったフィクションです。250年ほどの短い歴史しかもたない資本主義経済は、明らかに人間が創った「主義」（フィクション、非現実の「理想」＝イデー）の産物です。だがこれが「現実」となります。そしてこの「現実」の批判は学生にとっては理想論で済ますのではなく現実的として受け止められているようです。しかし、この受け止めは間違っています。「資本」もまたフィクションです。人間が創った仕組み・仕掛けに過ぎません。

+++++

戦争を生み出す「国家」、このフィクションは「現実」と捉えられ、「市民同士は戦争（殺し合い）をするつもりは全くない」という「現実」は背景に追いやられています。その結果、「殺し合いたくない人間」を「殺し合う人間」に変えるのです。「戦争絶対非認」は非現実の「理想」＝イデーに落とし込まれるのです。そこでは兵役拒否は「非国民」になるのです。だが、この転倒した意識を問うことこそがカントの「永遠平和のために」の全問題の核心です。「国家」とは何か、「国民」とは何かです。

他方、戦争を生み出す「資本」のリアリティ（現実性）に対する批判を、多くの学生は理想論として済ませていません。だが、この「資本」もまたフィクション（人間が創った仕組み・仕掛け）です。このフィクションが「現実」と捉えられています。この「現実」は変えられます。

人間が創った仕組み・仕掛けを、人間が変えることは可能です。それは新たな仕組み・仕掛け（平和状態）を創るという課題です。例えば、現在の国際連合のあり方、経済システムの新たな創造という課題です。学生との短時間の対話でしたが、「現代の学生のリアリティとは何か」から考えさせられています。それは1969年当時の学生の新たな仕組み・仕掛け（平和状態）を創ろうというリアリティとの違いを省みながらです。

（しげもと　とうすい）

<追記>

よみがえる 一人殺せば 殺人者 百万殺せば 英雄の叫び 冬水

（製作・監督・脚本・主演チャールズ・チャップリン、映画「殺人狂時代」1947年より）

<この映画のセリフ> フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より

Wars, conflict - it's all business. One murder makes a villain; millions a hero. Numbers sanctify. （戦争や紛争、これは全てビジネス。1人の殺害は犯罪者を生み、100万の殺害は英雄を生む。数が（殺人を）神聖化する）。

⇒殺し合いのビジネスに強制動員される人々、これが戦争の現実、狂気です。

⇒私は戦争を絶対非認します。

《冬水文庫だより》

重本冬水

文月 7 日の七夕の日（13:00～17:00）、「本のギャラリー」なるものを、はじめて開きました。絵画、書画、写真の展示はギャラリー（美術作品展示室）として違和感なく受けとめられます。しかし、本は美術作品ではなく「学術作品」の展示として開くということになります。かつて内田義彦『作品としての社会科学』（同時代ライブラリー、岩波書店、1992 年）という本がありました。今回、「作品」としての展示本は約 260 冊、大学評価学会、市民科学京都研究所などの刊行誌（在庫本）、冬水文庫の所蔵本の展示です。この準備に時間を要しましたが、不十分ながらどうにか整いました（今後、毎月、一部入れ替えをします）。

「本のギャラリー」、どうなることやら、わからないまま、当日を迎えました。しばらく誰も来ず、お茶を飲みながら、店番（展番）を続けました。その後、来客がありました。少しホッとしました。さて、「本のギャラリー」はどのように受け止められるのか。不安は残りつつも、来客者の興味・関心のあるテーマ、今回は、教育、大学事情、社会問題など、展示本を通しての会話が続きしました。お茶を飲みながらの談話室（サロン）のような雰囲気でした。絵画と書画、写真を通じた会話とは違いました。会話は思った以上に広がり、あっという間に 17:00 の閉展になりました（本稿末尾に来客者からいただいた当日の写真を添付します）。

多分、「本のギャラリー」という世界でも珍しい取り組みだと思いますが、今回で、そのイメージ、雰囲気が少しつかめてきました。今後、どうなるかわかりませんが、京言葉の「はんなり」と続けていきたいと思っています。「はんなり」とは「上品で華やかな感じがするさま」ですが、上品さと華やかさを目指しながら、ぼちぼちと地味に続けていきたいと思っています。「宣伝・広報をしては」というアドバイスをもらいましたが、しばらくは小さくはじめて、少しずつ広がっていくことでいいと思っています。これも「はんなり」の「品」と思います。もうひとつの京言葉、「商いとデンボ（おでき）は大きくなれば潰れる」といったこともあります。毎月第一日曜日、13:00～17:00 の 4 時間、「本のギャラリー」の中で、一人「はんなり」と時間を過しながら、徒然なるままの風のごとく、人が訪れ、本を持ち帰ってくれることを願っています。

今回の来客者は五人です。うち初対面の方はお二人です。当日、合計 20 冊ほどの本を持ち帰ってくれました（無料、カンパ有り）。予想以上に歓談が出来たこと、在庫本・所蔵本の数少し減り「死蔵」ではなく「活用」されること、この二つのことが何よりもうれしいことです。

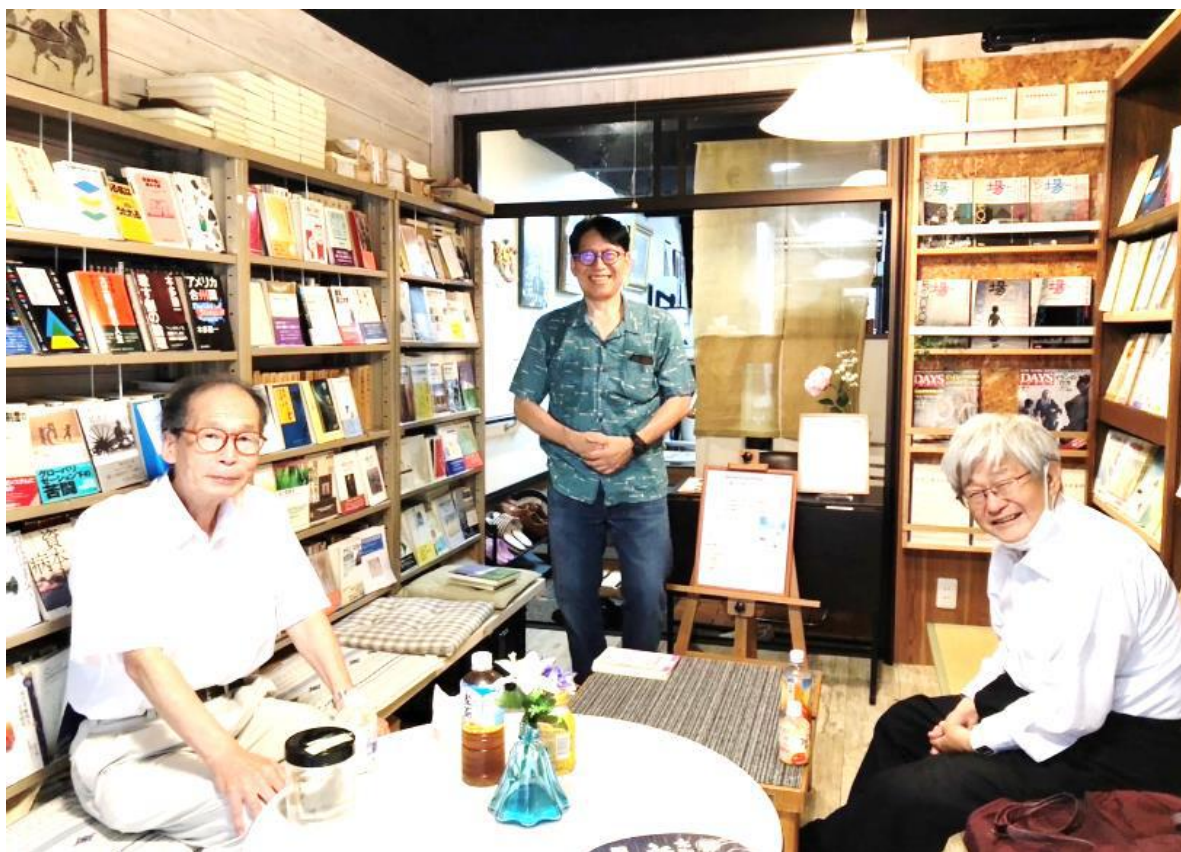
本は交換手段ではないかと思ひ始めています。お金が経済活動、商品・サービスの交換手段としますと、本は精神活動の交換手段と思えてきます。お金が溜め込まれ流通しなくなると経済活動は縮小し（破綻）に陥ります。本も在庫が山積みになれ（「死蔵」され）流通（活用）しなくなると精神活動は縮小し破綻に陥るのではないかと。流通する本、活用される本、本を精神活動の交換手段として捉えてみたい。この交換手段は無料です。価値は精神活動の飛躍・躍動です。

次の「本のギャラリー」は 8 月 4 日（日）13:00～17:00 です。徒然なるままの風のごとく訪れていただければ幸いです（以後の予定は、9 月 1 日開展、10 月 6 日は休展します）。

（しげもと とうすい）

※「冬水文庫」の正式名称は「NGO 京都社会文化センター冬水文庫」です。2023 年 2 月 4 日に発効しました NGO 京都社会文化センターの「申し合わせ事項」に基づいています（『京都社会文化センター活動史（1999 年—2023 年）』汎工房、2023 年、123 ページをご参照ください）。

本のギャラリーの風景（2024 年文月 7 日）



追伸：7月13日（土）、全南大学校人文科学大学の金貞禮先生が冬水文庫に来られました。2019年11月の光州訪問以来の再会です。また、社会文化学会会員のお二人が京都社会文化センターの2000年から2005年にかけての日韓市民文化交流事業についての資料収集と聞き取りのために来られ、金先生との意見交換も行われました。2000年5月の京都での「光州週間」、光州写真展、講演会、コンサートなどの取り組みを振り返りました。1999年11月に金先生に始めてお会いし、この取り組みが実現しました。それから25年が過ぎようとしています。

付記： 冬水文庫（榎木町通り町家ギャラリー冬水）の案内

<主な展示内容>

ギャラリーA（書籍；1階南室）

本のギャラリー

ギャラリーB（写真；1階北室）

照井日出喜作品(ベルリンの役者たち)

ギャラリーC（絵画；2階南室）

福西次郎作品(絵画)※

三島倫八作品(油絵)

ギャラリーD（書画；2階北室）

洪成潭作品(版画)※

安重根「獨立」(書画)※

(※は冬水文庫所蔵)

【短信】まどろみ

中村共一

まとまった通信原稿が作成できず、「一息」つかざるをえません。

いま熟考を重ねているテーマは、「市民の平和力とは何か」というものです。この「市民の平和力」という言葉は、考えてみると深い意味をもっているようで、ふと口からでたものの、簡単に説明できるものではありませんでした。それどころか、その「切り口」さえも暗中模索する始末で、あれこれと書物をあさってばかりです。そうして、かろうじて行き着いたのが、下記の「目次プラン（仮）」に示した「切り口」（自然・文化の視点）です。

- 1 「市民」と「平和の論理」
- 2 カントの永遠平和論
- 3 戦争・資本主義と二つの文化 ―暴力と平和―
- 4 市民の平和力 ―新世界をつくる社会文化―

この「切り口」は、気づいてみると、僕の研究キャリア（管理社会研究、社会文化研究）を反映しています。今更ながら、自分が求めてきたものが“ここだった”のかと思い知ることになりました。とはいえ、そこでは沢山の「宿題」も抱え、引きずっています。なので、自分のフィールドだからといって簡単に説けるわけでもありません。こんなことで、あらためて多くの論点を解いていく、やっかいな作業に直面しているしだいです。

原稿の内容を簡潔に示せるといいのですが、それができるくらいなら、すでに原稿を書いています。ですので、原稿の内容に替えて、僕が最も気になる論点だけを記すことにします。

その気になる論点というのは、柄谷行人さんが示された「憲法の無意識」という論理です。『憲法の無意識』（岩波書店、2016年）という本で、この点の論究がなされています。しかし、ここでは同時期の雑誌（社会運動 No. 419、2015年7月号）で語られた一文から、そのエッセンスをみておきます。

戦後日本の保守派は憲法九条を、アメリカによって強制されたものだということで、批判してきました。左派の中にも、憲法九条を自発的な選択として選びなおすべきだという人たちがいます。しかし、私はそのような意見を疑います。そもそも、占領軍が朝鮮戦争の段階で、九条の改定を要求してきたとき、日本人は自発的にそれを斥けた。それ以後も、五〇年間、何度も選挙を経てそれを再確認してきた。したがって、憲法九条は人民の自発的な選択にもとづいているのです。彼らがそのことを認めないのは、それが最初に占領軍によって強制されたものだからです。しかし、強制と自発性はまったく背反するわけではありません。

日本人は九条を強制されたあとに、それを自発的に支持したのです。このことを、どう説明すればよいのでしょうか。フロイトはこういっています。《人は通常、倫理的な要求が最初にあり、欲動の断念がその結果として生まれると考えがちである。しかし、それでは、倫理性の由来が不明なままである。実際には、その反対に進行するように思われる。最初の欲動の断念は、外部の力によって強制されたものであり、欲動の断念が初めて倫理性を生み出し、これが良心というかたちで表現され、欲動の断念をさらに求めるのである》「マゾヒズムの経済的問題」（1924）。

フロイトのこの見方は、憲法九条が外部の力、すなわち、占領軍の強制によって生まれたにもかかわらず。日本人の無意識に深く定着した理由を見事に説明します。つまり、外部の力による戦争（攻撃性）の断念が先ずあって、それが良心を生みだし、さらに、それが戦争の断念をいっそう求めることになったのです。¹

このように柄谷さんは、憲法九条を支えてきた倫理を問題とし、その倫理の根拠を「日本人の無意識」のうちに捉えようとされています。精神分析を通じて、「自然的人間」の「欲動」（とりわけ攻撃欲動）のあり様を明らかにしたS.フロイトの研究に依拠しつつ、「外部の力による戦争（攻撃性）の断念が先ずあって、それが良心を生みだし、さらに、それが戦争の断念をいっそう求めることになった」と理解していくのです。換言して繰り返してみれば、日本人の「集団的自我」において、「戦争（攻撃性）の断念」（攻撃欲動の断念）があったからこそ「良心」（「超自我」）を生み出し、それが「憲法九条」（戦争放棄）を支えることになったという論理になります。

憲法九条は戦後日本の「平和運動」²によって支えられてきたと理解していた僕からすれば、これは衝撃的な論理で、僕の思考は大混乱です。柄谷さんの提起には、「侵略戦争の経験」をたんに倫理的に受け止めるのではなく、その倫理自体を科学的に反省し、運動化していく論理があったのです。しかも、その論理は、人間の意識的活動ではなく、その外部にある人間の「無意識」との関連によって、「倫理の論理」を深めたものでした。さて、これをいかに「消化」すべきか？

この論理は、もともと資本と国家を超える「世界革命」論からきたもので、「世界革命」（＝「永遠平和」）を展望する柄谷さんの「交換様式」論の要をなしています。ソ連の崩壊によって「国家社会主義」論が破綻した今、この「世界共和国」論の提起には説得力があり、僕自身、積極的に受け止めてきました³。しかし、資本と国家を超える「人間の実践」論——「無意識」を含めて——としては、共感を覚えながらも、なお疑問が付きまっています。I. カントの「自然史」⁴としての歴史変革と「資本と国家を超える歴史変革」を同一の論理レベルで説明できるものかどうか。後者にあつては、論理的に具体化され、「自然史」（無意識）と同時に「社会史」（意識）が大きく関係してくるのではないかと。こういった疑問が湧いてくるのです。この疑問からすると、後者の「資本と国家を超える歴史変革」の理解にあつては、無意識（超自我）の問題は、「社会」（社会運動）との関連において、その「歴史変革」の把握が具体化される必要があるように思えます。「歴史変革」の問題は、ただ無意識の次元に従属してあるわけではなく、それに基礎づけられながらも、意識的な社会運動としてあるのではないかと考えるのです。

柄谷さんの論理は、当然ながら、憲法九条の存続問題とつながっています。その問題にも、やはり、その根底にある「戦争（攻撃性）の断念」を現象的に確認するだけでなく、その「断念」（超自我）の社会的形態（平和運動）との関連で説明してはじめて十分な説明となるのではないかと、といった同様な疑問を感じるのです。これをいかに解くか。それが柄谷さんへの疑問であり、同時に僕の課題なのです。

さてさて、どうしたものか……。この問題に頭を悩ませながら、まどろんでいるうちに、あることに気づきました。フロイトも、柄谷さんも、「文化」概念に目を向けることがある。二人とも、十分展開されているわけではないけれど、「超自我」の問題を「文化」概念と結びつけようとしています。それに気づいてみると、僕のキャリアにあった「社会運動＝社会文化」観がひょっこり顔を出してきました。ひょっとすると、これらの「文化」概念を探っていけば、僕の疑問も解けてくるのではないかと。こう思ったわけです。が、如何せん、気づいたときはまどろみのなか。文章になるわけありません。

さてさて、顔を洗って出直します。

(なかむら きょういち)

注

1. 柄谷行人「神の国・超自我・非戦について」社会運動 No. 419、2015 年 7 月号、161～162 頁
2. 戦後日本の「平和運動」については、多くの文献があります。参考までに三つを挙げておきます。
『非戦・平和の論理』田畑忍編、法律文化社、1992 年。
『反戦平和の思想と行動』吉川勇一編、社会評論社、1995 年。
『20 世紀の平和思想』小菅信子、岩波現代全書、2015 年。
3. 中村共一「アソシエーションイズム運動 ―国家を超える社会主義―」市民の科学、第 12 号、2022 年 6 月。
4. ここで「自然史」とは、通常の「自然の歴史」を意味するのではなく、自然的人間の特性を踏まえた歴史観を意味しています。カントの『世界市民という視点から見た普遍史の理念』（1784 年）を参照。



松本清張と丸山眞男

竹内 真澄

戦後を代表する二人の知識人を対照する。

	松本清張（1909-1992）	丸山眞男（1914-1996）
生まれ	極貧家庭	中産インテリ家庭
学歴	尋常小学校	東大法学部
職業	給仕、印刷工見習い、作家	東大法学部教授
兵役	中国戦線。平等を感じた	朝鮮戦線。屈辱を感じた
考察対象	フィクション/ノンフィクション。古代史、近現代史	日本政治思想史
使える外国語	英語、ドイツ語	ドイツ語、英語
学生運動への関心	全共闘嫌い	全共闘嫌い
親族との関係	母親への思慕	母親への思慕
物事への態度	内在主義	超越主義
仕事量	多作、最盛期月間 2200 枚	寡作

たった一枚の対照図から私たちが学ぶことは無限にある。丸山は極貧家庭に生まれることはできなかった。もし生まれていたとしたら、彼は『日本政治思想史研究』（1952）を書いただろうか。また、清張がもし中産インテリ家庭に生まれていたとしたら、『或る「小倉日記」伝』（1952）を書いただろうか。

思想史や文学史の中で客観的課題は常に高いところに存在するが、それを具体的に推し進める人物は、様々な幸不幸をかいくぐって、ほとんど偶然に出てくる。しかし、いずれ出てくることだけは必然なのだ。まことに人生は不思議なものだ。

（たけうち ますみ）



ニュートンとスタンダー

竹内 真澄

近くて、狭くて、浅いことは論じるに容易である。
地震が起こった時、遠くの地震なら関係ないやと考えがちだ。
いい歳をして、向こう三軒両隣のことでしか論じない人がある。
野菜が高いと文句を言うが、農民の苦勞に思いが届かない人もいる。

だから、世の中には近くて、狭くて、浅い世界に閉じこもって暮らす人は、決して少ないとは言えないのである。ことは、視力 eyesight ではなく、すぐれて視座 perspective に関わる。ゆえに、視座の転換なしに、一生近くて、狭くて、浅いことだけにかかわって死ぬ人も決してまれではない。

どんな人にとっても、近くて、狭くて、浅いことはわかりやすい。
だから、子どもに語りかけるときには、宇宙のことや、大昔のことや、裏に隠れた真実を教える場合、きるだけ近くて、狭くて、浅いところに例を求めて、そこから遠くへ、広がって、深まっていけるようにすべきだろう。

林檎が木から落ちることは誰でも知っていることである。実が熟したから落ちたと思うのだ。しかし、もし引力がなければ、たとえ実が熟したとしてもそれは落ちない。つまり、リンゴが落ちるといって一個の落下現象を万有引力の現れであると悟ったのはニュートン(英 1642-1727)が最初であった。

林檎が大地に落ちたのではなく、林檎と地球という二つの物体が引きつけ合っていると解釈したのである。これによって、原子核から天体まで同一の論理で考えていけるようになった。

大事なことは事柄の扱い方なのである。近狭浅が価値が低いわけではなくて、あるいは遠広深が価値が高いというのでもなくて、近狭浅を遠広深と同一の論理でつかまえることが重要なのだ。外国を高尚なモデルとして日本を卑下するのも、反対に、過剰に祖国を持ち上げるのも、ここで言う同一の論理の欠如にすぎない。むしろ課題は、同一の論理にたったうで理想を掲げることである。

人間はだれでもが近狭浅の世界に生きている。肉体が有限だからである。けれども、それを遠広深の世界と同一地平に位置づけたとき、近狭浅と遠広深を一举にわかるような境地があるのだ。大学とは、そういう視座が可能なのだということに気づいていく場所であり、過程である。

スタンダー(仏 1783-1842)は『赤と黒』1830 を書いた。これは一人の男ジュリアンが二人の女レーナル夫人とマチルドを好きになる話だ。ありふれた三角関係の話である。近狭浅の世界であると言ってもよい。しかし、これは同時に遠広深の話でもある。というのは、スタンダーは、3人の痴話が意味するのは、復古王政(1815年から1830年まで)期の王党派支配をブルジョアジーが打倒する過程において起こるべくして起こった、一人の野心的な青年の悲劇として、ほとんど理念型的な純粹さで、描いたからである。

スタンダーは、ニュートンが行ったのと同じことを文学において再現して見せた人であり、この意味でニュートンが世界的な物理学者であるのとまったく同じ意味で、世界的な文学者なのである。

(たけうち ますみ)

普遍「不到」

竹内 真澄

1. 不偏不党ではない。人間社会で、そんなものはない。では、普遍に到達できるかという、不可能ではないが、なかなか大変である。明日到達できるとは言えないかもしれないけど、みんなトライしようね、というあたりが適切な立場であろう。よって普遍「不到」である。

2. ぼくが最近気に入っているテーゼは、「恋はしたごころ、愛はまごころ」である。これは純粹漢字学的な解説であり、人生論ではない。恋という字の下には心があり、愛という字の真ん中に心がある、と言うほどの意味である。

これを人間関係にひろげて解釈することはできる。したごころは利を得ようとするから、利がなくなるとこころが渴れてしまう。ところが、まごころがあれば、まごころは減るものではないから、人間はいつでもお地蔵さんのようにニコニコしていられる。人間関係は、したごころではなく、まごころがあつてこそうまく回るだろう。

3. 野生の鳥が巣立ちの時、兄弟は枝に並んで翼いっぱい風を受け、2, 3度羽ばたき、ついに一番が飛び立つ。二番三番は、それを「おおっ」という感じで見つめている。お手本に対する凄い観察だ。集中と学習がただごとではない。何をなすべきか、若鳥は知っているから、ブレない。ぼくはこういうのに感動してしまう。

普遍を目指し、まごころをもって、ブレないとき、人間はおおいに健全でありうるだろう。

(たけうち ますみ)

P. S. 7月末に拙著『坊っちゃんの世界史像』（本の泉社）を上梓いたします。『市民科学通信』に既発表のもののアンソロジーですので、同人の皆さんにとっては新味がありません。自費出版のため金欠でもあり、『通信』の広告になるので同人以外の方に献本させていただきます。ひとえに『通信』のおかげですので、この場をかりてお礼申し上げます。悪しからず。

近況短信：ファンタジーにある「古い」

—団地タクシー奮闘記「タクシー繁盛記」の巻—②

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは先日 76 歳になったキャリア 6 年目の老人です。タクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー（老老）相互扶助の泣き笑い報告です。

ここで「タクシー」と銘打っていますが、電動アシストのついた、重さ 100 キロ近くある三輪自転車です。ヒトとモノを乗せると自身の体重もあり、かなりの重量になって、ペダルが相当重くなります。「開業」して 12 年以上になりました。

ここ数年、団地タクシーを利用する住民が増えています。昨年比で 20% 増です。高齢者の住民が増加しているのが主因です。いえ、それは数字上の話であって、それだけではないと思います。私たちの仕事は、営業ではありませんから、「接客サービス」は素人で洗練されていません。でも、それぞれの運転手が醸し出す雰囲気というか、色合いが出てきて味わい深いのではないのでしょうか。そこに魅力があると、自画自賛しています。なんの根拠（エビデンス）もないのですが。

私たちが居住する団地は、高齢者に「優しい（易しい、も）」という評判が広がっているようです。民間の賃貸住宅は、年齢制限や所得制限だけでなく、単独者を受け入れないところがあります。その点、ここはそういう制限がありません。加えて、高齢者に便利な我が「団地タクシー」があります。クリニックがあり、薬局があり、デイサービスがあり、高齢者相談センターまであります。加えて、高齢者を対象にした地域食堂があって、衣食住の不安を、いや「医食住」の不安を解消する施設もあって、それなりに充実しています。

毎週土曜日になるとやってくる I さんは、わが「団地の縁側」に来て紅茶かこぶ茶（飲み物オール 100 円）を飲んで、団地タクシーを利用して帰宅します。それが土曜日、週一の楽しみだと言ってます。80 歳になって、この団地に単身引っ越してきた女性で、意識も意思もはっきりした人ですが、ただ忘れっぽく、自宅の棟番号を即座に言えないところがあります。そこは本人も自覚していてとてもチャームングです。利用する乗客の新人さんです。

また、毎日のように「お迎え」と「送り」を希望する M さんは、耳が遠いので会話はほとんど成立しません。でも、土曜日は「高尾駅」周辺までバスを利用して、外食を楽しんでいます。ゼスチャーで「おいしかったかな？」と尋ねると、満面の笑みで応えてくれます。

§

まだ 6 月だというのに、早や真夏日がやってきました。みなさん、「天気予報」が必見で熟知していますから、団地タクシーを利用するのも、11 時から 12 時半、まだ日差しが強くない間に集中します。先日は私の担当ではなかったのですが、11 時現在で 7 名ほどの乗車予約が入っていて、急きょ 2 台目を運転することにしました。12 時 10 分までに担当の H さんが 7 名、私が 5 名運ぶ結果になったのです。計 12 名です。

普段はタクシー 1 台で運行するのですが、状況が状況なのでもう一台を出して、2 台体制で臨

んだのです。「お迎え」であれ「送り」であれ、この団地では、毎日救急車がやってきて、誰もが「またか」と「普通」のことと思っています。そういう毎日ですから、この「お迎え」と「送り」という言葉には、鈍く、鈍くではありますが反応してしまいます。この世の「此岸」とあの世の「彼岸」の橋渡しを思い起こすからです。

そんな思いを脳裏に置きながら、ともかくペダルを漕ぎます。いずれであれ、1件で最低10～15分ほどかかります。二人でピストン輸送の芸当で、12名の運送はもちろん休みなしでした。「繁盛」するというのは“過酷”なのです。

という経験から、真夏日、猛暑日を迎えるにあたって、本格的な二人体制を考えています。タクシー2台ではなく、タクシー1台で二人が順番に交代、交代で運転する案です。一台での運行ですから、順番待ちは改善されません。でも運転する人は10～15分ほどの休憩がとれます。これは助かります。私は団地住まいなので、しかも団地タクシーの運行責任者なので、「臨機応変」に対応することが求められるのです。

何であれ、繁盛店では行列ができて順番待ちを余儀なくされます。予約優先ですが、空いた時間は早いもの順なので、乗客の間で疑心暗鬼がうまれることもあります。団地タクシーは2台あるのに、なぜ1台の運行なのか？という質問というか抗議も受けます。順番待ちにいら立っている人たちです。

「行列のできる店」というのが評判になったのはいつのころからだったのでしょうか？ご自分の都合で団地タクシーを利用しようとしているのですが、そこに「密集」が生まれ「待ち時間」が長期化します。個人の自由な選択が、結果、個人の自由を制限します。学生時代に知った「特権財」と「自由財」を思い出します。限られた人たちにのみ提供・享受される財が「特権財」なのですが、場合によっては順番待ちを避ける人がいますから、団地タクシーも「特権財」になりかねません。辛いところです。

§

前回（団地タクシー奮闘記「補聴器が必要？」の巻一⑱）で取り上げた「難聴」の話の続きです。ポイントは、高齢化に伴う「加齢性難聴」の障害を持つ人が増えていること、それはコミュニケーション能力を著しく低下させること、にもかかわらず日本は欧米に比べて「補聴器」を利用する人が少ないこと、でした。

試しにと思って、私、補聴器ではなく「集音器」を使い始めました。約4週間になります。操作に慣れてきたこともあって、ふつうに会話する分には申し分ないのですが、タクシー利用者との会話、「傾聴」はどうかといえば、いまのところ残念な結果になってます。集音器は「集音」ですから「音」を選んでくれません（私が購入した集音器の性能によるものかもしれませんが）。団地タクシーのペダルを漕ぐと、タクシーの悲鳴のような雑音が容赦なく耳に飛び込んできます。音に優先順位がありませんから、音が「密集」した状態になります。ですから、乗車した人と、運転中の会話は高架下の様相みたいで、きわめて困難であることが判明したのです。加えてこの猛暑の中、休みなくペダルを漕がなければならないので、「傾聴」どころではないという事情もあります。

「振り出しにもどる」でした。

つづく

＊「団地タクシー」は、八王子市内のUR大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

（みやざき あきら）

追悼 久我美子さん

照井 日出喜

I

久我美子さん出演の数多くの映画のなかで、わたしにとって最も深く心に刻まれているのは、小津安二郎監督の《彼岸花》（1958年）と、木下恵介監督の《風花》（1959年）である。

前者は、有馬稲子さんの「平山節子」、山本富士子さんの「佐々木幸子」、そして久我さん演ずる「三上文子」という、言うなれば三者三様の若い女性たちの結婚もしくは恋愛を巡る物語であり、恋愛結婚を示す上昇直線と見合い結婚を示す下降直線が交錯するのが60年代とされているのに照応するが如く、その交錯点へと向かう直前の、見合い結婚から恋愛結婚へと大勢が転回する過渡期における親と娘の葛藤がテーマの作品である。「三上文子」は、父（笠智衆）の理解が得られぬことに反発して家を飛び出し、本来は音楽理論が専門ながら、心ならずもキャバレーでピアノを弾く「長沼一郎」（渡辺文雄）と同棲して、みずからはバーのホステスとして働きつつ、どうにか糊口を凌ぐ女性であるのだが、自分の生き方に忠実であろうとして父親と衝突することに申し訳なさを感じつつも、なお毅然として真摯な態度を崩すことはない。その文子を演ずる久我さんは、けっして意固地でもなければ不貞腐れてもおらず、愛する相手との生活を誠実に維持しようとする人物を、小津監督一流の女性の美しさをフィルムに刻むさいの感性の高さと相俟って、きわめて生き生きと表現する。

後者は、「にんじんクラブ」——1954年に三人の若い女優（岸恵子・有馬稲子・久我美子）が（無謀であることには眼もくれず）創設した映画プロダクション——の当事者たちが、揃って出演した作品である。日本舞踊の発表会という設定のもとでの久我さんの舞姿は、いかにも優美な雰囲気湛え、華族の出自である彼女は、あるいは幼い頃から稽古事の一つとして日本舞踊を習い、それを自家薬籠中のものとしていたのではないかと想像したくなるほどである。その優美さは、信州善光寺平の美しく壮大な風景を背景に展開されるものの、全体としては人間の暗い運命が描かれるこの作品全体のトーンと、鮮やかなコントラストをなしている。

戦中から戦後にかけての時期、18年前、小作人の娘である春子（岸恵子）は17歳で、大地主の名倉家の次男である英雄と恋に落ちるが、所詮は叶わぬ恋という絶望から、抱き合ったまま川に飛び込む。しかし、英雄は死ぬものの、春子は生き残る。英雄の父は骨壺を川に放り込んで怒り、春子の父は自殺する。身重となっていた春子は周囲から白眼視されるが、世間体を気にする名倉家は彼女を引き取り、英雄の父は、生まれた子を捨雄と名づける。春子は、わが子がそのような名を持つことに必死に抵抗するものの、彼女には一言もなく、すでに役場に届けられた後であった。英雄の父夫婦と家族は、つねに母子に辛く当たった。彼ら二人は一家の団欒に加わることも許されず、食事もつねに二人だけで部屋の隅で済ませた。名倉家には、死んだ英雄の兄夫婦に、その一人娘で、捨雄より七つ年上の日本舞踊を習うさくら（久我美子、少女時代は和泉雅子）がいた。彼女だけが捨雄を可愛がり、出かける時には、幼い捨雄に「外に出てはだめよ、またいじめられるからね」と優しく語りかけた。捨雄は、近所の悪童たちに、「捨て子！捨て子！」と離し立てられていじめられ、憤然と反撃するものの、多勢に無勢、殴り倒されるのがつねであった。やがて時は移り、さくらの結婚が決まった。さくらは、自分に所詮は叶わぬ愛を抱く捨雄の心情の美しさが、その空虚な生活を救っていたことに気づき、彼に舞扇を贈る。しかし、婚礼の当日、春子は息子が悲しみのあまり川の深みへと進んで行くのを見て、必死に川に入って

追いかけて、思いとどまらせる。いまこそ名倉家を去るべき時期が来たことで、二人は新しい土地での新しい生活へと旅立って行く。

II

久我美子さんの「フィルモグラフィ」によると、彼女の生涯に出演した映画は100本に及んでいる（注1）。わたしにとってメインとなるのは1950年代の作品であり、それゆえ、ほとんどはDVDによって観ることのできたものであり、全体の約5分の1に過ぎない（ただし、その多くは、当時を、そしてまた日本映画を代表する諸監督の作品である）。

《酔いどれ天使》（黒澤明監督、1948年）

塵芥とどぶ川と得体の知れぬ闇市のみが支配する終戦直後の街。黒澤監督が執拗に描き出す汚物にまみれたどぶ川からは、画面を突き抜けて悪臭が襲ってくるかの如くである。

17歳の久我美子さんが、セーラー服姿の胸を病む高校生に扮する。しかし、同じように胸を病みながら、無謀な殴り込みをして返り討ちに遭って殺害されるチンピラの松永（三船敏郎）とは異なり、彼女は結核が快癒して満面の笑みを浮かべ、どぶ川の横で悪臭とともに開業する貧乏医者^{（志村喬）}の真田と嬉々として腕を組み、人間たちが蠢く闇市の薄汚い雑踏の中へと消えて行く。

黒澤監督は、若々しい久我さんの存在を、戦争で叩きのめされた現実を乗り越えて行く人びとの象徴として撮っていたのかも知れない。

《あの手この手》（市川崑監督、1952年）

林芙美子原作の小説に基づく成瀬巳喜男監督の《めし》（1951年）でも、大阪の岡本初之輔（上原謙）と三千代（原節子）の夫婦のもとに、東京から「家出」した初之輔の姪である里子（島崎雪子）が転がり込んできて、それでなくてもやや不穏な空気が流れる夫婦の間に騒動を巻き起こすことになるのであるが、この喜劇《あの手この手》でも、大阪近郊に住む、あまり冴えない万年助教授の鳥羽（森雅之）と、社会的に八面六臂の活躍をし、宿六・鳥羽はおよそ頭の上がない近子夫人（水戸光子）のもとに、三重から近子夫人の姪であるアコちゃんが家出して来る。なんとなく均衡を保っていたかに見える鳥羽夫婦の家庭が、突如として引っかき回されることになるのであるが、この、天衣無縫にしていささか傍若無人な、しかしまた利口でもあるアコちゃんが久我さんであり、喜劇の喜劇たる所以と言うべきか、最後は人間関係のすべてが明るい雰囲気^{（霧）}に包まれることになる。

《大つごもり》（《にごりえ》第二部、今井正監督、1953年）

樋口一葉の《十三夜》《大つごもり》《にごりえ》がオムニバス形式で展開されるこの映画では、第二部が、久我さんが山村家の女中お峰を演ずる《大つごもり》に当たっている。原作自体が短篇であることにもよるが、40分弱の作品である。

今井正監督の視角のゆえもあるが、この映画でなによりも強烈に心を撃つのは、山村家のお嬢様たちと、お峰たち女中との間にある、あまりの格差の大きさである。来るべき新年を前にして、豪華な着物を身にまとって賑やかに羽根突きに興ずる娘たち（そのなかの一人は、岸田今日子さんである）と、寒さでかじかんだあかぎれの手で、終日、力仕事に追い立てられ、たった一日で辞めて行く娘たちがいるほどに凄まじい酷使が「普通」である女中奉公とは、まさしく棲む世界の異なるものであることが示される。しかも、病に倒れた伯父に金を工面^{（すこし）}することを約束したはずなのに、「それはお前が何ぞの間違へ、わたしは毛頭も覚えの無き事」と、事もなげにそれを反故にして恥じることのない、ただひたすら口喧しく傲然と支配するのみの奥様（長岡輝

子)を前にして、お峰は絶望の淵に立たされ、罪の意識ゆえに逡巡に逡巡を重ねた上で、ついに主家の部屋の引出しから2円を盗んで伯父に渡す。

山村家(父と継母)に反抗し、カネを無心しては仲間たちとの酒盛りに蕩尽する、じつは心優しい放蕩息子石之助(仲谷昇)が、ラスト、家のカネを20円、無断で「拝借」して一筆認めることで(「引出しの分も拝借致し候 石之助」)お峰の罪を救う。「孝の余得は我れしらず石之助の罪に成りしか、いやいや知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし」(樋口一葉《大つごもり》)。

《あにいもうと》(成瀬巳喜男監督、1953年)

室生犀星の《あにいもうと》は、彼が1934年に発表した短篇小説であり、兄である「伊之吉(原作では伊之助)」とその妹の「もん」とを巡る、いささか錯綜した愛情劇であるが、この短篇から90分を要する映画として創り上げられた本作には、原作にはないサブストーリーが幾つか盛られており、その最たるものが、久我さん演ずるもんの妹である「さん」が、姉の「不行跡」をも一つの理由として、愛する若者と別れねばならぬ運命に突き落とされる経緯である。もん(京マチ子)は、奉公先で学生の小畑と恋愛関係となって妊娠し、実家に帰って流産するや、それからは自暴自棄の生活にみずからを叩き込む。そうした「ふしだら」な姉の妹であるさんは、うどん屋の養子と駆け落ちの寸前まで行くものの、結局は苦い涙とともに諦めざるを得ない。

小畑は謝罪のためにもんの実家を訪れるが、もんはおらず、帰り道、兄の伊之吉(森雅之)に待ち伏せられ、散々に殴られる。数カ月後に帰ってきたもんは、その話を聞いて逆上し、兄と妹とは凄まじい取っ組み合いの喧嘩に突き進む。もんはしこたま殴られるが、しかし、一度は自分が愛した相手を一方的に殴った兄を許すことができず、「さあ、殺せ!殺しやがれ!」と、畳の上に大の字になって啖呵を切る。伊之吉は、もんを小さい頃から可愛がり続けたがゆえに、彼女が惨めな生活に堕したことへの失意と絶望に駆られているのであり、ほんとうは兄を愛するもんも、それはよくわかっていたのである。ラスト、もんとさんの姉妹は、実家に別れを告げ、陽光を浴びながら、相合傘の日傘を差して、田園風景のなかを去って行く。

(この短篇は、1972年に、山田洋次脚本・演出のもと、渥美清・倍賞千恵子の兄妹でテレビ映画化されている——なんとなく、《男はつらいよ》を彷彿とさせる配役であるが、テレビドラマであるから、各シーンはいわば「長回し」の撮影となり、二人の壮絶な殴り合いの場面では、倍賞さんがいささか気の毒に思えたほどであった。)

《女の園》(木下恵介監督、1954年)

いまから70年前の1954年には、溝口健二監督の《山椒大夫》、《近松物語》と《噂の女》、黒澤明監督の《七人の侍》、成瀬巳喜男監督の《山の音》、稲垣浩監督の《宮本武蔵 第一部》、山本薩夫監督の《太陽のない街》、大庭秀雄監督の《君の名は 第三部》、木下恵介監督の《女の園》と《二十四の瞳》、島耕二監督の《風立ちぬ》といった、そのほとんどが日本映画史そのものの礎石をなすような諸作品が生み出された。じっさい、この一覧自体が、すでに「黄金時代」を象徴するかの如くであり、卓越した映画作家たちの矚目すべき映画群が、このわずか1年の間に発表されたことに感嘆せざるを得ない(小津安二郎監督には、1953年の《東京物語》から56年の《早春》まで、少なくとも発表された作品群には空白があるようである)。

《女の園》は、いまとなってはまさしく隔世の感があるのだが、阿部知二の中編小説《空中庭園》(1953年、すなわち、映画はその翌年に製作されたことになる)に基づく、京都郊外の女子大における学生運動の顛末を描いた作品である。大学当局は、「良妻賢母の育成」を金科玉条のごとく掲げて学生たちをがんじがらめに規則に縛り付け、徹底的に彼女たちの行動や思想を束

縛する。入学式のさいの「赤ら顔の^{おお}巨きな体の前大臣」の祝辞が典型的に示すように、「絶対に戦後の浮薄な気風に染まってはな」らず、「かりそめにも思想問題にかぶれたりしてはいけない」のであり、「日本婦人の美德」は「聖天子を崇める心にその根をもつ」ものとされるのである（注2）。さらには、「かりそめにも、男に指一本触れられたとしたならば、もう墮落の坂を奈落まで転げ落ちてゆくことになる」（注3）というのが「精神講話」の内容をなす。寄宿舎の学生たちは、さまざまな形でそれに反発し、抵抗しながら、学生組織を作って対抗しようとする。しかしもちろん、その出自や入学の経緯の相違ということもあり、彼女たちにあっても運動に関する意見は必ずしも一致するものではなく、くわえて、当局の巧妙な懐柔政策・切り崩しによって自殺者も出るほどに困難を引きずるものとなる。何人かの学生は退学や停学の処分を受けるものの、しかし、学生たちは大学当局をさらに糾弾すべく、引き続き集会を組織する。

映画の中心となるのは、敦賀の出身のいささか奔放な性格の持ち主にしてテニスの選手でもあり、テニス仲間の男子学生との交際が大学の知るところとなって停学処分を受けた「不良」の滝岡富子（岸恵子）、奈良出身で、「赤い思想の持ち主」と噂される活動家タイプの学生ではあるものの、親が大学の有力なスポンサーの一人であるがゆえに「特別扱い」される林野明子（久我美子）、姫路出身で、3年間の銀行員生活を経て入学したために、規則の消灯時間を過ぎてまで勉強しなければ授業についていけずに深く苦しみ、東京の大学に通う恋人の下田（田村高廣）との自由な文通さえ禁じられて懊悩する出口芳江（高峰秀子）、彼女たちを監視する「切れ者」の五条真弓寮長（高峰三枝子）である。

運動の先頭に立って学生たちを鼓舞するのは久我さん演ずる林野明子であるが、当局によって退学を含む処分を受ける学生がいる一方、出口芳江だけは穏便な処分を受ける——大学による陰湿な分断政策であり、芳江は他の学生たちからの反発を受けることになり、ついには深刻なノイローゼに陥って自殺する。当局と学生との軋轢は、必然的にますます強まることになる。

原作のラストでは、そうした困難な事態に放り込まれ、犠牲者を出しながらも、若い世代から「また新手がぞろぞろと現れてくるだろう」という、大学の補導監である教授・平戸喜平の「危惧」が表明される。その「危惧」は、阿部知二にあっては逆に秘めやかな願望であったに違いないが、そうした50年代の初頭になされ得た願望は、画面から突き抜ける学生たちの熱気とともに、2000年代の現在では、すでに窒息させられて跡形もない。

《風立ちぬ》（島耕二監督、1954年）

河上徹太郎は、「戦争末期の予備学生の九分九厘までが堀辰雄の愛読者だったと聞いたが、自分の青春の美しさと、心ならず迫り来る死の実感とが結びついて、今いったのと同じ気持——「自然なんぞが本当に美しいと思えるのは死んで行こうとする者の眼にだけだ」という、死にゆく節子書き手である小説の主人公の言葉を思い出して反復する言葉——が彼らには湧いて来たのであろう」と書く（注4）。戦争末期、堀辰雄の内面性の発露にせめてもの救いの影を見出した、そしてまた、戦争から辛うじて生き残ることのできた人びとは、戦後9年を経て創られたこの映画（主演：久我美子・石浜朗）をスクリーンに観ながら、みずからを苛み続けたかつての死への恐怖を、今は亡き仲間たちへの深い悲しみとともに想起したことであろう。

ただし、作品そのものは、死のリリシズムが静謐に展開するのみの原作を映像化することはたしかに至難の業だったに違いないとはいえ、原作のプロットに大幅な、かなりの程度まで原形を留めぬほどに通俗的な改変が加えられることによって、全体にいささか平凡な趣きを持つにいたっていることは事実であり、わたしにはそれが不満である。

《噂の女》（溝口健二監督、1954年）

「溝口の映画を総体として見ることは、日本の男たちのあらゆる種類のダメさ加減、下等さ加減の展示会を見るようなものであり、そういうダメな男たちによく耐え、よくつくしたたくさんの女たちを見ることである」（注5）というのが、佐藤忠男のいかにも正しくも痛切な評言である。新藤兼人監督は、溝口監督の「成功した作品は、下層社会の女をあつかった場合のみである」と書き、「ぎりぎりの生活を背負った女たち。けんめいに、本能的に、ひたすら生きる女たち。それはまた、男に尽くす女でもある」（注6）とも書く。「溝口健二の幼時に影響を与えた母と姉の生き方は、女に対する見方を決定づけ、溝口自身の血肉となったようである。反面、溝口健二は父をはげしく憎んだ。父と子は宿命的に対立するものだが、母を仕合せにすることができなかった父を、溝口健二はゆるすことはできなかった」（注7）。およそ飲んだくれで生活能力のない父のゆえに、姉は芸者となり、ついにはいわゆるお妻さんとなって家の生計を支えたのであり、溝口監督は、自分を育ててくれたのが姉の屈辱的な人生であることを、少年の頃から痛切に思い知っていたのである。

溝口監督の背中には、カミソリで切られた傷の跡があった。大杉栄を切ったのは、のちに社会党の代議士となる神近市子であったが、新進監督時代の若い溝口監督を切ったのは、同棲していた雇女（注8）の一条百合子であった。溝口監督に斬りつけた一条百合子は、ひと昔前の言い方では「コールガール」と呼ばれる存在だったと言われ、凶行のさい、溝口監督は血まみれになって逃げ惑ったとのことであるが、新藤監督は、「斬る斬られるの関係はただの仲ではない。命がけの愛のやりとりがあったにちがいない」と推察している（注9）。後年の溝口監督は、風呂でその古傷を見て驚くスタッフに、「これでなきゃ女は描けませんよ」と言ったとのことであるが、たしかにそうであるには違いない。

《噂の女》の舞台となるのは、馬淵初子（田中絹代）が女手一つで切り盛りする、京都島原の廓で太夫の置屋兼お茶屋の井筒屋である。「太夫」は、たしかに豪奢な着物と髪飾りを身に着けた女性たちではあるが、しかし遊郭であることに変わりはなく、まさしく下層社会の、そしてまた、いかに望もうともそこから抜け出すことのできぬ女性たちが、時として故郷の人びとや風景を、懐かしく、悲しく思い起こす場所である。この井筒屋は、病気になった太夫たちが医者に診てもらえることができるという、例外的な店ではあるが、当然のこととして、「日本の男たちのあらゆる種類のダメさ加減、下等さ加減」が白日の下に曝される場所でもある。

この作品における田中絹代さんの演技の冴えには、感嘆せざる得ないほどである。じつのところ、彼女は4年前の1950年に、小津安二郎監督のもとで大佛次郎原作の《宗方姉妹》^{むねかた きょうだい}に出演して姉の節子を、高峰秀子さんの妹の満里子とともに演じたのだが、当時の彼女が世間から激しいバッシングを受けて憔悴し切っていたからでもあろうか、「姉妹」というよりは「伯母と姪」の如く見えるほどで（もちろん、衣装と結髪のゆえもあるが）、妹・満里子の才気煥発で生き生きとした存在の陰に隠れるようできえあったのだが、4年後のこの《噂の女》の母・初子は、さまざまな仕草や表情の変化がいかにも洗練されたりズムを持っており、年下の医者への愛情もしくは執着、みずからの娘・雪子（久我美子）に対する嫉妬、といった生々しい心理もしくは情念の表現は、いかにも華やいだ趣きさえ持っている。

初子の一人娘である雪子は、東京の音楽学校でピアノを学んでいたのだが、自分の勉強が母親の遊郭の女性たちによって支えられていることに深い嫌悪と自責の念を抱いていた。しかも、婚約寸前になっていたにも関わらず、相手が母の職業を知って破談にしたことに絶望し、彼女は自殺を図る。初子はそれを知って雪子を急いで東京から京都に連れ戻すのだが、病気の太夫を献身的に看病する雪子の姿に、仲間の太夫たちは皆、涙を流さんばかりに感謝する。

初子は、若い医者への的場を愛し、結婚して、彼に土地を与えて開業させようとするのであるが、

的場は雪子にも接近しようとする。初子は娘に対する嫉妬で逆上するが、雪子は、的場がたんにカネ目当ての与太医者であることを見抜き、テーブルの上で鈍く光る裁ちばさみを引っ掴んで彼を糾弾する。一条百合子さんとは異なり、雪子は与太医者を刺すことはしなかったが、彼はひたすら恐れをなして消えて行く。初子は病床に就き、雪子はやむなく太夫たちの女将の役を引き受け、かいがいしく仕事に打ち込む。

病死した太夫の妹が、雪子のもとに、ここに置いてくれるようにと頼みに来る。雪子も、太夫たちも、「こんな所に来ちゃいけない」と諭すのだが、彼女は、父の病気の治療費のため、どうしても置いて欲しいと懇願する。少女をこのような境涯に追い込むことが、いつになってもなくなぬことを嘆きながら、太夫たちは暗い街へと歩を進めて行く。

溝口監督は、1956年、その最後の作品となる《赤線地帯》を、吉原を舞台として、京マチ子・若尾文子・木暮実千代・三益愛子といった役者たちとともに撮る。馬鹿な男どもを騙して貸布団屋に納まるやすみ（若尾文子）以外は、悲惨な境涯の下、悲惨な思いをしながら、悲惨な生活が続けていくことになる。少女が逡巡しながら初めて街頭に立つシーンがラストである。

《億万長者》（市川崑監督、1954年）

市川崑監督は、1957年の《満員電車》の如く、社会風刺の色濃いブラックコメディ映画を撮っているのだが（主役は川口浩）、この《億万長者》は、ある意味ではその線上にある映画である。税務署の徴税係の気の弱い主人公（木村功）が、汚職やら汚辱やら虚言やらにまみれた職場のなかで四苦八苦し、一念発起、敢然と行政監視委員会に証人として立つのであるが、緊張のあまりか、あるいは生来の気の弱さが災いしたのか、とたんに口が利けなくなってしまい、めったやたらに腕を振り回す行為を繰り返したために、狂人としてその場からつまみ出されてしまう。

この映画における久我さんの役は、「鏡すて」という、自分の家族全員が広島原爆で死んだことに報復すべく、家賃も払えぬまま、貧しい借家の二階を「実験室」に仕立てて、ニコヨンをしてながらみずから原爆を製造する若い女性である（この映画から四半世紀後の、理科の教師が世界への反逆を企てて原爆を製造する、長谷川和彦監督、沢田研二主演の《太陽を盗んだ男》を想起させる）。彼女の「実験」は笑いを誘うが、しかしまた、それはグロテスクの極致でもある。

この映画については、「この作品には監督名のクレジットがない。当初は松竹系で配給が決まっていたが、紆余曲折の末に新東宝での配給が決まった。しかしその際、原爆による現実と幻覚が交錯した爆発を描いたラストシーンをカットするという条件を、プロデューサーが監督の市川の承諾なしに受け入れて上映させたため、市川が抗議の意味で監督名表記を拒否する事態となったためである」という記述があり（[億万長者 \(映画\) - Wikipedia](#)）、映画のプロット同様、一筋縄ではいかぬ軋轢の経過を辿ったらしい。

《新・平家物語》（溝口健二監督、1955年）

溝口監督の成功した作品は、「下層社会の女をあつかった場合のみ」、という上述の新藤監督の言を正しいとすれば、この《新・平家》は、失敗作となるべく運命づけられていることになる。じっさい、この作品は、市川雷蔵扮する若き清盛が、それまで貴族や天皇家の番犬として扱われてきた武士による権力の篡奪、つまりは下剋上への確然たる意志を抱くにいたるまでのプロセスを描いたものであり、およそ下層社会の懸命に生きる女性たちが前面に出ることはない。

その清盛の妻時子を演ずるのが久我さんである。清盛亡き後、壇ノ浦での平家滅亡のさいには、涙にくれる幼い安徳天皇を胸に抱き、「浪の下にも都のさぶらふぞ」と慰めつつ入水した二位殿であるが（《平家物語》、「先帝身投」）、清盛の妻となる前の彼女は、貧しい下級公家の娘であったと言われ、この映画でも、彼女は貧困の中でてきぱきと働く賢明な娘として描かれている。

この映画のためには、さまざまな部署のスタッフたちが、それぞれ膨大な資料を蒐集し、当時の衣装、子どもたちの遊び、牛車の種類、武器、馬具、家具、履物、等々といったものを、できる限り忠実に再現しようとする努力を重ねている（注10）。この時期の映画界は、まだ総体的に潤沢な予算があったからであろうが、この映画でも、街のなかの群衆シーンなどに起用されるエキストラは、それこそ膨大な数に上っており（これはたとえば、東映の時代劇における庶民の祭り、芝居の客席、大名行列などの場面にも妥当する）、清盛の青年時代の市場の庶民や僧兵たちの群れを、膨大な小道具とともに表現することに成功している。

ただ、いわゆる下剋上、つまりは、清盛の武士政権確立への意志が、いささか孤立した、言わば彼の個人的な願望という趣きを見せるのは、当時、たとえば前九年の役や後三年の役を契機として、源氏の武士たちもまた、つまりは、武士階級全体が次第に台頭しつつあるという歴史的背景が、映画ではまったく暗示されていないことに由来するには違いなく、その意味では、「歴史絵巻」としての重層性に欠けるところがあるように思われる。

くわえて、清盛がみずからの父が誰かを巡って懊悩するシーンは長きに失しており、いささか緊張感を欠いている。白河院の落胤説は広く知られているが、「落胤であることは、この時代にはむしろマイナスに作用することが多かった。将来の皇統の後継者と見られ、反対勢力の監視にあい、その成長が阻まれることが多かった」（注11）という指摘もなされており、そうであるならば、白河院の落胤であろうがなかろうが、暗殺されることなく異常な速さで出世の階段を登る幸運に恵まれることは、まずは僥倖と言うべきであったであろう。

《夕やけ雲》（木下恵介監督、1956年）

久我さん演ずる長女・豊子の母（望月優子）は、貧しい魚屋をなんとか経営しながら病に倒れた夫（東野英治郎）を抱えつつ、「うち辺りには健康保険もないし、医者にかかるのが怖くて」と嘆くのであるが、豊子はそんな家族の窮状には無頓着で、モノとカネに執着することで「自己保存」の欲求を満足させようとする「モダン」な女性であり、富裕な家庭の息子と信じて交際していた恋人（田村高廣）も、その父親の経営が破綻して贅沢三昧の生活が不可能になったと見るや、いったんは捨て去り、カネのために二回りほど年上の重役の後妻に収まるものの、再びかつての恋人に近づいて遊び呆ける、という、役者としての久我さんのイメージとはいささか異なる女性を演じている（もっとも、彼女の出演作は多岐にわたっているから、ここで「イメージ」と称されるものは、たんにわたしの一方的な「片思い」によるものなのかも知れない）。

《お早よう》（小津安二郎監督、1959年）

いわゆるホームドラマであり、ドラマらしいドラマが展開されるわけでもなく、東京郊外とおぼしき所の新興住宅地に住む人びとの日常が描かれる。配役はいつもの「小津組」の常連で、家事とともに、近所への陰口やら、ちょっとした嫌がらせやらに日を暮らす奥さん連中（杉村春子・長岡輝子・三宅邦子・高橋とよ、等）とともに、定年間近の林（笠智衆）や、定年後の収入の激減ゆえに職探しに日を費やす富沢（東野英治郎）といった人物たちが配置され、当時、テレビが次第に家庭に侵入して来る状況を反映しているのであろう、林家の二人の男の子が、ただただ自分たちの家で大相撲を見たいばかりにテレビをせがみ続け、親たちに叱られて家でも学校でも「沈黙の行」を守って口を利かず、しまいにはちょっとした「家出」もどきのことをしでかして大人たちを慌てさせる。林は、電器店の外交に再就職した富沢から、彼の再就職祝いにテレビを買い、子どもたちは念願が叶って躍り上がって喜ぶ。

久我さんは、林家の妻・民子（三宅）の妹で、姉の二人の男の子たちとともに林家に同居する、会社員・有田節子を演ずる。会社が必要とする英文の翻訳を、近くのアパートに住み、出版社が倒産したために収入源を失った福井（佐田啓二）に依頼に行くのも仕事の一つである（福井青年は、子どもたちが——サボらなければ——英語を習いに行く家庭教師でもある）。

久我さんは、例によって言うべきか、端正かつ誠実な雰囲気漂わせる「小津流・久我美子さん」である。節子と福井は、互いにひそかに好意を抱いており、福井の姉（沢村貞子）は弟に、「ああいうお嬢さんがあなたのお嫁さんにいいのにねえ」と言うのであるが、失業中という境涯もあって福井は煮え切らず、映画は、朝の駅のホームでいっしょになりながら、二人が当たり障りのない会話を繰り返すさまを描いて終わる。

《青春残酷物語》（大島渚監督、1960年）

小津監督の《彼岸花》や《秋日和》では、あまり出番はないものの、いずれも優しくチャキチャキの娘役で登場する桑野みゆきさんが、この作品では恋人・藤井清（川津祐介）と共謀し、ヒッチハイクで乗り込んだ車の運転者に暴力をふるってカネを強奪する美人局を繰り返すものの、自己嫌悪に駆られて疾走する車から飛び降りて命を落とす学生・新庄真琴を演ずる（藤井清も、不良グループに真琴を引き渡すことを拒んで殺害される）。その真琴の姉・由紀に扮するのが久我さんで、かつては政治運動に身を投じた経験を持ちながら挫折し、同じく以前、政治運動に加わりながら、いまはしがない場末の医者で妊娠した真琴の墮胎を行う元恋人（渡辺文雄）と絶望的な愚痴を言い合う関係にある。藤井清の周囲には、学生運動に参加し、デモ隊のメンバーとして活動する学生たちもいるのだが、彼はそれに興味はなく、真琴も同様である。

1960年、まさしく60年安保の年の映画である。当時、この作品は、吉田喜重監督の諸作品ともども、ジャン＝リュック・ゴダールの犯罪映画《勝手にしやがれ》のような作品群を念頭に、「松竹ヌーヴェルバーグ」の映画として売り出されたとのことであり、興行的にも成功したらしいのだが、大島監督にせよ吉田監督にせよ、まもなくそれぞれの独立プロに移っていくのであるから、その呼称は短命に終わったのであろう。

《ゼロの焦点》（野村芳太郎監督、1961年）

久我さん演ずる鶴原禎子は、たしかに名目的には「主役」であるが、じっさいには影の薄い存在に留まり、まったくの狂言廻しに過ぎない。新婚の夫・憲一の失踪に疑問を抱き、さまざまに推理を働かせながら幾つかの土地に飛び、夫を殺害した真犯人に辿り着く、というプロットに寄与してはいるものの、彼女自身が「ドラマ」の核心をなしているわけではない。「ドラマ」を形成するのは、終戦直後の立川でアメリカ兵相手の「パンパン」であった女性であり、かつ、それを絶対に他人に知られてはならぬ女性、すなわち、いまや地方の代表的な名士となった室田佐知子（高千穂ひづる）と、佐知子と同じ過去を持ち、憲一が曾根益三郎という偽名のもとに内縁の関係にあった田沼久子（有馬稲子）である。憲一は、戦後の一時期、立川で警察の風紀係をしていて、仕事はアメリカ兵相手の女性たちの取締りであり、したがって、彼は彼女たちの過去を知る人間であった。田沼久子とは、そうした経緯で内縁関係に入ったのであろうが、しかし、戦後、絶望的な努力の末に営々とみずからの地位と名声を築き上げた室田佐知子にとっては、彼の存在は邪魔以外のなにものでもなかった。東京への転勤と禎子との結婚を機に、憲一（＝曾根益三郎）は田沼久子を捨てるつもりであったのであろうが、佐知子は、曾根の自殺を偽装する名目で憲一を呼び出し、崖から突き落とす。さらには、事情を嗅ぎ回る憲一の兄・宗太郎も殺害する。清張の原作では、同じく事情を知りつつある憲一の後任・本田を田沼久子が殺害し、彼女はその罪におびえてついには自殺するのであるが、映画では、本田は田沼久子に殺害されることはなく、ラスト、久子は佐知子の車のなかで、誤って青酸カリ入りのウィスキーを飲んで絶命する。悲慘な境涯のもとで戦後の混乱期を生き抜きながら、結局はそうした悲しくも哀れな死を迎えるのである。佐知子も、原作では小舟で海に乗り出すことになるのだが、映画では、久子の非業の死を知って、そのまま車で海の中へと飛び込んで行く。

《風林火山》（稲垣浩監督、1969年）

井上靖の原作は、戦国の世に生きる、もしくは、望むと望まぬとに関わらず戦国の世に生きることを運命づけられ、望むと望まぬとに関わらず合戦で相手を斃すことを強制される武士たちの生と死が全面に出るのであるが、映画化された場合は、やはり合戦の場面そのものが大きな比重を占めることになるがゆえに、原作とはいささか異なる印象を残すことになる。

久我さんが扮するのは武田信玄の継室である三条の方であるが、じつのところ、信玄の側室にして勝頼の母であり、若くして亡くなる、佐久間良子さん演ずる諏訪御料人（由布姫）への嫉妬に燃える正室として、彼女に、「父を討った人の囲い者になりたいくて、はるばるやって来るとは、国は亡びたくないもの」と冷たく言い放つためにスクリーンに現れるのみである（注12）。

久我美子さんは、2024年6月9日、93歳で亡くなられた。溝口健二・小津安二郎・黒澤明・成瀬巳喜男といった諸監督とともに、主として1950年代の日本映画の最盛期を貫いて疾駆した、華奢な、しかしまた知的な存在感を放射し続けた役者であった。

（注1）藤井秀男編『「にんじんくらぶ」三大女優の軌跡 久我美子 有馬稲子 岸恵子』、エコー・セザム、2010年、29ページ以下。

（注2）阿部知二《空中庭園》、『日本文学全集 50 阿部知二・芹澤光治良集』、新潮社、1964年、146ページ。

（注3）同書、150ページ。

（注4）堀辰雄《風立ちぬ》《美しい村》への「解説」、岩波文庫、1956年、180ページ。

（注5）佐藤忠男『溝口健二の世界』、平凡社ライブラリー、2006年、132ページ。

（注6）新藤兼人『ある映画監督—溝口健二と日本映画—』、岩波新書、1976年、45ページ。傍点は引用者。

（注7）同書、55ページ。

（注8）「ヤトナ芸者」という場合には、いわば出張もしくは「派遣」でお座敷に出る芸者であり、典型的なのは、おそらくは織田作之助の《夫婦善哉》に登場する蝶子であろう（織田作之助《夫婦善哉 正統》、岩波文庫、2013年、所収）。売れっ子芸者だった彼女は、うっかり惚れてしまったばかりに、妻子持ちの柳吉といっしょになるのだが、柳吉は彼女がヤトナ芸者として稼いでくる金をごっそりくすねては、遊郭やカフェで放蕩して無一文となって帰って来る。そのたびに蝶子は、彼を散々に引っ叩き、喉首を締め上げて折檻の限りを尽くすのであり、彼はヒイヒイ逃げ回って謝るのだが、もちろん、蝶子に報酬が入れば、柳吉は通帳を盗み出して性懲りもなく同じことを繰り返し、蝶子に折檻される羽目となる。溝口監督ならば、しょうもない男に尽くして苦勞する芸者が主人公なのであるから、この小説の演出に成功したのではないかと思われるのだが、映画化されたのは、1955年、豊田四郎監督のもとでの森繁久彌・淡島千景のキャストによってである。

（注9）新藤兼人、前掲書、60ページ。

（注10）宮嶋八郎「溝口健二監督の映画作法」、[新平家物語 \(katsu85.sakura.ne.jp\)](http://katsu85.sakura.ne.jp)

（注11）五味文彦『平清盛』、吉川弘文館、1994年、7ページ。さらにこの書では、まず清盛の母が白河院の思い人であった祇園女御の妹ではないかという仮説のもとに、清盛の父忠盛は、この女性との間に清盛を儲けたのではないかという推測がなされている（要するに、清盛の出生は謎のままだということである）。

（注12）井上靖《風林火山》、新潮文庫、2005年、74ページ。

（てるい ひでき）